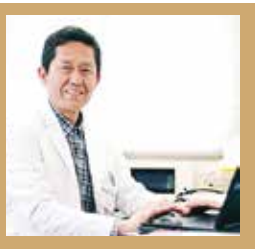
『母から娘へ、父から息子へ』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也



母から娘へ、父から息子へ、と私たちは、遺伝子だけでなく、無形のなにものかを継承していく存在でもあります。

Iさん(61歳)は、婦人科系の悪性腫瘍で闘病生活を続けて来られていた方でした。幾度かの手術を含む辛い治療にも耐え、10年以上にもわたる長い期間を頑張って来られていました。

Iさんには3人の娘がおり、娘たちは皆さんそれぞれに自分の家庭を持つ母親になっていました。廣内ケアマネジャーからIさんへの訪問診療の依頼があった際、開口一番お伝えくださったこと(患者さんと家族に関する情報？)は、「ご本人さんも3人の娘さんたちも、皆さんものすごく美人なんです！」でした。(自己弁護のために念のため言っておきますが、別に私がいつもそういうことを気にしているというような事実は一切ございませんので、賢明なる読者は勘違いをしないようお願い致します。)

Iさんは、娘たちに心配をかけまいとして、病気の進行を治療では食い止められなくなってからも、体調の悪さを隠して、なるべく普通の日常を過ごしておられたようです。が、遂に気力体力ともに底を尽き精魂尽き果て、ベッドから起き上がることもできない程の状態になって初めて、娘たちにも実情が明かされました。もはや隠すことができる状態でもありませんでした。

Iさんが亡くなる数日前のことです。もはや寝返りする力もないIさんは、ベッドに力なく横たわったまま、みすぼらしい(←ご家族の表現)服を着ていた次女を見て、「もっときれいにしなさい。お父さん、服を買いに連れて行ってあげて…」と病床から夫に頼まれました。命尽きようとする時にあっても、Iさんはやはり娘たちの母親でした。夫は直ぐに次女を連れて服を買いに行き、奇麗な服を着せてIさんの前に立たせました。Iさんは満足そうに頷いて微笑まれました(後日談ですが、夫は、不公平になってはいけないと思い長女と3女には同額程度のお金を渡したところ、次女は「私もお金の方がよかった！」明るく楽しい美人三姉妹でした)。それぞれが既に母親となっている娘たちに対して、彼女たちの母親としての愛情を与え尽くして、初回訪問から数えて12日目の朝、Iさんは眠るように安らかに旅立たれました。美しい死顔でした。

Mさん(59歳)は、大きなお寺のご住職でした。お元気な頃のMさんにお目にかかったことはありませんでしたが、Mさんはご住職をされながら仲間たちとフォークサウンドのバンドを組んで、ギター兼ボーカルとして定期的にコンサートを催したりされていたようです。なぜ私がそれを知ったかと言うと、Mさん宅を最後に訪問した際、素敵な歌が部屋に流されていたので、そこに居られたご家族に「いい曲ですね」と申し上げたところ、なんとその曲はMさん自身がお作りになって自分たちのバンドで演奏していたのでした。もちろん、ギターと歌はMさんが担当しておられました。Mさんのボーカルを含め、とても素敵な演奏でした。

Mさんは、ご住職として、お寺の門前に掲示されている言葉を、毛筆の見事な書体で、いつも書かれていました。Mさん宅への初回訪問を終えた帰り際、何気なく目をやった門前の掲示版には、次のような言葉が書かれていました。**「迷惑をかけたくないが迷惑をかけずにはおれない私」**私は、ハンドルを握ったまま思わず息を呑みました。もはや自分一人では何もできなくなったMさんはどのような思いでこの言葉を書かれたのか…それは、あまりにも重く深く静かな力強さで胸に迫ってくる言葉、Mさんが人生の最後に実感を持って到達した「真理の言葉」でした。この言葉についてMさんと話がしたいと思いましたが、わざわざそのためにMさんのところに戻るのも変なので、今度伺った時に…と思いながらMさんのお寺を後にしました。が、Mさんとそれについて言葉を交わす機会は残念ながら訪れませんでした。初回訪問から僅か2日後、1年5カ月の闘病生活を終えて、Mさんは浄土に赴かれたからです。

Mさんが旅立たれた後、僧侶としての修行を終えて数年前から父親と一緒に働かれるようになっていた長男さんが住職を引き継がれました。新住職の言葉を見たいと思い、私は門前に向かいました。新住職は、まだ父親ほどの達筆ではありませんが、力強い字で次のように書かれていました。**「希望は死なない『ローグワン』スターウォーズ・ストーリーより」**父から息子へ、希望のバトンは引き継がれました。